

大学運動部活動における勝敗に対する態度と部活動適応感の関係について - 集団凝集性を媒介変数としたモデルの検討 -

The Relationship Between the Attitudes toward the Victory and the Adjustment to Clubs in University Athletic Clubs: Collective Cohesion as a Mediator

高山 優明* 中須賀 巧**
TAKAYAMA Yuan NAKASUGA Takumi

本研究では、大学運動部活動における勝敗に対する態度、集団凝集性、部活動適応感の関係について検討することを目的とした。本研究の目的を遂行するにあたり、勝敗に対する態度を独立変数、集団凝集性を媒介変数、部活動適応感を従属変数とした仮説モデルを設定し、モデルの妥当性を検証するために共分散構造分析を行った。その結果、以下3点が明らかとなった。①勝敗に対する態度と部活動適応感の直接的な関係については、勝利志向性は部活動適応感に有意な正の影響を示した。②勝敗に対する態度と部活動適応感の間接的な関係については、勝利志向性は社会的側面に対する集団の一体感に有意な正の影響を示し、社会的側面に対する集団の一体感は部活動適応感に有意な正の影響を示すことが確認された。③レクリエーション志向性は、集団凝集性と適応感に影響を示さなかった。以上のことから、勝利志向性が高い部員は、運動部活動において集団凝集性も適応感も高い傾向にあることが示唆される。一方でレクリエーション志向性が高まっても、集団凝集性や適応感の向上・低下には影響しないことが示唆される。

キーワード：運動部活動、集団凝集性、部活動適応感、勝利志向性、レクリエーション志向性

Key words: athletic clubs, collective cohesion, adjustment to clubs, victory orientation, recreation orientation

I. はじめに

スポーツ庁(2018)は、「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」の中で、学校の運動部活動には、体力や技能の向上を図る目的以外にも、異年齢との交流の中で、生徒同士や生徒と教師等との好ましい人間関係の構築を図ったり、学習意欲の向上や自己肯定感、責任感、連帯感の涵養に資するなど、生徒の多様な学びの場として、教育的意義が大きいことを示している。また、大学におけるスポーツの振興は、大学のスポーツ施設の地域住民への開放や総合型地域スポーツクラブの運営を通じて、大学の枠内にとどまらず、広く国民の健康増進に資するとともに、地域・社会の活性化の起爆剤となりうるものであり、障害者スポーツの振興や男女共同参画等を通じて共生社会の実現に寄与するとともに、国際交流の推進やスポーツ文化の振興により人間性を涵養し社会を形成する人材の育成に貢献する可能性がある。

大学スポーツ協会は、2019年にUNIVASという新たな組織を創設した。この組織は、大学スポーツの振興、参画人口拡大を推進するために、運動部学生のデュアルキャリア形成支援事業、大学スポーツの安全安心な環境確立事業、ブランド価値向上およびDX推進事業など数多くの事業を展開しながら、新たな大学スポーツの発展を目指している。また大学運動部活動には、「人間関係・協調性」や「コミュニケーション力・主体性」など高等

教育で涵養されるべき力が習得できる機会が備わっている(金森・蛭田, 2018)。しかし、大学生になってまでも高校の時のように運動部活動には参加したくない、これ以上しんどい思いをしてまで大学で運動部活動に参加する必要はないなどといった声を聞くことがある。大学になってからも運動部活動への参加を促し、さらには運動・スポーツを継続してくれる、そのような学生の増加が期待されている。

運動部活動を継続できる学生とそうではない学生では、部に対する適応感の違いがあるのではないかと考えられる。例えば、運動部活動に対して適応感に着目している研究では、部に対して適応状態が良好な選手は、所属する部の強さに対して強い自信を抱いており、運動・スポーツへの継続意欲も高いといった特徴を示す傾向があること(尼崎・清水, 2009; 青木・松本, 1997)、また運動部活動での適応度の高さが学校生活全体の満足感の向上に寄与していること(角谷・無藤, 2001)などが明らかにされている。一方で、適応状態の悪化は、自尊感情の抑制、スポーツ障害・外傷の発生リスク向上、バーンアウト発症、ドロップアウトの選択などを生じる傾向を強化することなどが報告されている(高田ほか, 1987; 桂・中込, 1990; 土屋, 2013)。

以上のことから、運動部に対する適応感を高めることは、良好な学校生活の実現、運動継続、そしてライフスキルの獲得など、その利点は大きく、また大学スポーツ

* 兵庫教育大学大学院(修士課程)人間発達教育専攻生活・健康・情報系教育コース

令和5年7月12日受理

** 兵庫教育大学大学院人間発達教育専攻生活・健康・情報系教育コース 准教授

協会が目指す大学スポーツの振興や参画学生数の維持・増加に影響を与えるのではないかと考えられる。

ところで、筒井ほか(1995)は運動部活動への参加者の勝敗に対する態度を、勝利への拘りや価値を重視する勝利志向性と、スポーツの余暇としての楽しさを重視するレクリエーション志向性の2軸で捉えている。また、勝利志向性の得点よりもレクリエーション志向性の得点が高い者は、運動スポーツへの積極的な参加や継続を希望する傾向があったが、レクリエーション志向性得点よりも勝利志向性得点が高い者は、運動スポーツへの消極的な参加や離脱を希望する傾向があることを報告している。離脱の主な原因として、勝敗にこだわるのが嫌でやめたというように、過度な勝利志向はスポーツ活動に様々な悪影響を及ぼす可能性があるとして指摘する(筒井ほか, 1996)。また杉山ほか(1996)は、青少年のスポーツにおけるストレスと勝利志向性との関係について検討しており、勝利志向の高い者の方が低い者よりもストレス度が高いという傾向がみられたことを報告している。

このように運動スポーツの勝敗に対する態度の違いは、スポーツ参加にも多様に影響し、先に述べた運動部活動への適応度に対しても異なる影響を示す変数の一つとなる可能性がある。

また本研究では、勝敗に対する態度と部活動適応感との関係を媒介する要因についても検討する。例えば、青木(1989)は、高校の運動部員の部活動継続と退部に影響する要因について検討を行っており、人間関係のあつれきが退部者の主な退部理由であることを明らかにしている。また中須賀ほか(2016)は、仲間とどんなことでも打ち明けることができるような自己開示経験が選手の部に対する満足度を高めるのではないかと示唆している。つまり、選手同士の人間関係のあり方は、選手の適応度にも何らかの影響を与えていると考えられる。このことから、媒介要因として選手同士の仲の良さ(選手間の仲間意識)や運動部内での人間関係を捉える概念として集団凝集性に着目する。

Carron(1982)は、集団凝集性について、「集団のメンバー間が引き合う魅力を維持する社会的な力であり、集団を分裂させる力に抵抗する力」と定義しており、簡潔に言えば集団凝集性は集団のまとまり感となる。運動部活動における集団凝集性に関する先行研究(小林ほか, 2016; 内田ほか, 2011)では、チームの競技パフォーマンスを高めることや選手個々の自信を高めることなども確かめられている。また集団凝集性と集団志向の関係を問う研究(阿江, 1985)では、レクリエーション志向が高い選手は、メンバーに対して好意的な感情を抱き、魅力的に感じていたが、競技志向が高い選手は、チームや部活動自体に所属することに魅力を感じ、対人への魅力度は低かったことが示唆されている。

これらを整理すると、勝敗に対する態度が部活動適応感に影響を与えるという直接的な関係と、心理変数のうち、とくに人間関係に左右されるものとしての集団凝集

性が勝敗に対する態度からの影響を受け、そして人間関係の在り方が適応感に影響を与えるといった間接的な関係が考えられる。しかしこれらの関係については十分に検討されていない。

以上のことから本研究では、運動部活動に参加する大学生を対象に、大学運動部活動における勝敗に対する態度と部活動適応感の関係性について、集団凝集性を媒介変数とみなす仮説モデルを設定し、そのモデルに従って勝敗に対する態度、集団凝集性、そして部活動適応感の関係について検討することを目的とする。

II. 方法

1) 調査対象および調査時期

大学において運動部活動に所属していた、または所属している学生を対象に、Google フォームを利用した質問紙調査を実施した。そのうち全項目に対し空欄解答の無い110名を有効回答者として以降の分析に用いた。調査は、2021年9月に実施した。

2) 調査内容

(1) 基本情報項目

基本情報項目として性別、年齢、所属している部活動についての記入項目を設定した。

(2) 勝敗に対する態度の測定

勝敗に対する態度を測定する尺度には、筒井ほか(1996)が作成した、勝敗に対する態度を測定する尺度の因子負荷量の高いものを5つ選び使用した。この尺度は、「勝利志向性」5項目、「レクリエーション志向性」5項目の2因子10項目によって構成されている(尺度項目は別表1に示す通りである)。「全くそう思わない(1点)から「非常にそう思う」(4点)までの4件法によって回答を求めた。

(3) 集団凝集性の測定

集団凝集性を測定する尺度には、内田ほか(2014)が集団環境質問表(Carron et al., 1985; Widmeyer et al., 1985)を使用し、織田ほか(2007)の表1に記載されている邦訳を一部修正した尺度項目(集団凝集性尺度の因子構造)を使用した。この尺度は、「課題的側面に対する集団の一体感」5項目、「社会的側面に対する集団の一体感」4項目、「課題的側面に対する個人的魅力」5項目、「社会的側面に対する個人的魅力」4項目の4因子18項目によって構成されている(尺度項目は別表2に示す通りである)。「全く違う」(1点)から「全くその通りだ」(9点)までの9件法によって回答を求めた。

(4) 部活動適応感の測定

本研究では、青木・松本(1997)が作成した部活動適応感測定項目のうち、運動部活動継続に関する第1因子とされる退部不適応傾向の測定尺度を使用した(尺度項目は別表3に示す通りである)。「あてはまる」(1点)から「あてはまらない」(4点)までの4件法によって回答を求めた。退部不適応傾向とは「退部には不適応」すなわち部に適応する傾向を意味し、質問項目には「自分の意思が弱く、部活をやめてしまおうと考えることが

よくある」や「きびしい練習についていけない」などがある。全て逆転項目として配点しており、得点が高いほど適応傾向が強いことになる。

3) 倫理的配慮

調査票冒頭において、この調査は自由意志に基づくものであり、途中で中断しても良いこと、また回答しないことよっての不利益は一切生じないこと、大学の成績とは関係がないこと、調査結果を研究目的以外で使用しないこと、個人の調査結果の秘密が守られることを明記している。調査は無記名形式で行われ、「本研究の目的を理解し、このアンケート回答することに同意いただけますか。」という質問に対するチェック回答をもって同意取得とみなした。

4) 分析モデルおよび統計解析

仮説モデルの検証に先立ち、各下位尺度の基本統計量として、平均値、標準偏差、相関係数を算出した。分析に用いる仮説モデルは図1に示す通りである。勝敗に対する態度「勝利志向性」「レクリエーション志向性」を独立変数に、集団凝集性「社会的側面に対する個人的魅力」「課題的側面に対する個人的魅力」「課題的側面に対する集団の一体感」「社会的側面に対する集団の一体感」を媒介変数に、そして部活動適応感を従属変数とした。仮説モデルの妥当性検証には、共分散構造分析を行った。すなわち、Goodness of Fit Index (以下、GFI), Adjusted Goodness of Fit Index (以下、AGFI), Comparative Fit Index (以下、CFI), Root Mean Square Error of Approximation (以下、RMSEA) の各適合度指標をもとに行うこととし、それらの基準は豊田ほか(1992)と室橋(2003)に倣い、GFIおよびCFIは0.90以上、

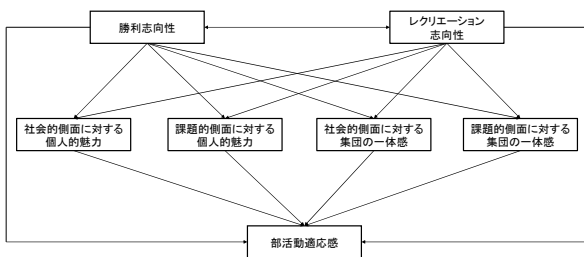


図1 仮説モデル

RMSEAは0.08以下、そしてAGFIはGFIとの差分が小さいこととした。有効水準5%のもと分析には、統計解析ソフトIBM SPSS Statistics 24を使用した。

III. 結果

1) 基本統計量

重回帰分析を実施するに先立って、調査内容の基本統計量として、平均値、標準偏差および相関係数を算出した。平均値、標準偏差および相関係数は表1に示す通りである。

勝敗に対する態度を測定する尺度の下位尺度「勝利志向性」は、同じ尺度の下位尺度「レクリエーション志向性」に有意な正の相関 ($r=.21$) を、集団凝集性を測定する尺度の下位尺度「社会的側面に対する個人的魅力」「社会的側面に対する集団の一体感」にそれぞれ有意な正の相関 (順に $r=.37, r=.26$) を、部活動適応感の測定の下位尺度「部活動適応感」に有意な正の相関 ($r=.28$) を示した。集団凝集性を測定する尺度の下位尺度「社会的側面に対する個人的魅力」は、同じ尺度の下位尺度(「課題的側面に対する個人的魅力」「課題的側面に対する集団の一体感」「社会的側面に対する集団の一体感」)にそれぞれ有意な正の相関 (順に $r=.41, r=.49, r=.75$) を、部活動適応感の測定の下位尺度「部活動適応感」に有意な正の相関 ($r=.49$) を示した。集団凝集性を測定する尺度の下位尺度「課題的側面に対する個人的魅力」は、同じ尺度の下位尺度(「課題的側面に対する集団の一体感」「社会的側面に対する集団の一体感」)にそれぞれ有意な正の相関 (順に $r=.81, r=.42$) を、部活動適応感の測定の下位尺度「部活動適応感」に有意な正の相関 ($r=.53$) を示した。集団凝集性を測定する尺度の下位尺度「社会的側面に対する集団の一体感」は、部活動適応感の測定の下位尺度「部活動適応感」に有意な正の相関 ($r=.45$) を示した。集団凝集性を測定する尺度の下位尺度「社会的側面に対する集団の一体感」は、部活動適応感の測定の下位尺度「部活動適応感」に有意な正の相関 ($r=.48$) を示した。

表1 各下位尺度の基本統計量 (平均値, 標準偏差, 相関係数)

下位尺度	平均値	標準偏差	相関係数						
			1	2	3	4	5	6	7
勝敗に対する態度									
1. 勝利志向性	14.31	2.59	—						
2. レクリエーション志向性	13.82	2.24	0.21 *	—					
集団凝集性尺度									
3. 社会的側面に対する個人的魅力	38.03	6.10	0.37 *	0.10	—				
4. 課題的側面に対する個人的魅力	28.56	5.39	-0.04	0.09	0.41 *	—			
5. 課題的側面に対する集団の一体感	35.28	7.37	0.05	0.12	0.49 *	0.81 *	—		
6. 社会的側面に対する集団の一体感	27.18	5.80	0.26 *	0.09	0.75 *	0.42 *	0.60 *	—	
部活動適応感尺度									
7. 部活動適応感	26.60	3.80	0.28 *	-0.01	0.49 *	0.53 *	0.45 *	0.48 *	—

* $p<.05$

2) 仮説モデルの評価

仮説モデルが妥当なものであったのかどうかを検討するために共分散構造分析を行なった。その結果, 設定したモデルの適合度指標は, GFI=.973, AGFI=.917, CFI=1.000, RMSEA=.000 であり, 基準を十分にみたす値が得られた (図 2)。

個別にパス係数をみると, 勝敗に対する態度と部活動適応感の直接的な関係については, 勝利志向性から部活動適応感には有意なパスが確認された ($\beta = .24$)。独立変数から従属変数への説明力を示す決定係数 (以下 R^2 とする) は $R^2=.42$ を示した。間接的な関係については, 勝利志向性が社会的側面に対する集団の一体感を高め ($\beta = .22, p<.05$), その社会的側面に対する集団の一体感が部活動適応感を高める ($\beta = .22, p<.05$) ことを示した。勝敗に対する態度と集団凝集性の関係については, 勝利志向性は社会的側面に対する個人的魅力と社会的側面に対する集団の一体感にそれぞれ有意なパスが確認された (順に $\beta = .36, \beta = .22, p<.05$)。なお, それぞれの R^2 の値は順に $R^2=.13, R^2=.05$ を示した。集団凝集性と部活動適応感の関係については, 課題的側面に対する個人的魅力と社会的側面に対する集団の一体感から部活動適応感に有意なパスが確認された (順に $\beta = .45, \beta = .22, p<.05$)。有意なパスが確認されなかった因子について, 勝敗に対する態度のレクリエーション志向性及び集団凝集性の課題的側面に対する集団の一体感はこの変数にも有意なパスが確認されなかった。

IV. 考察

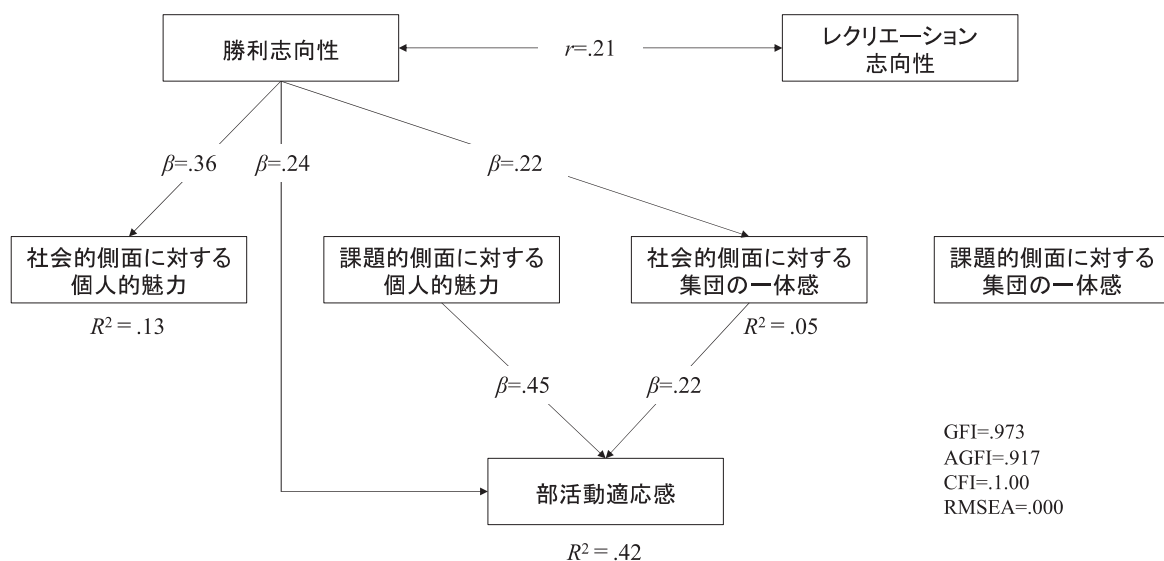
本研究では, 大学運動部活動における勝敗に対する態度, 集団凝集性, 部活動適応感の関係について検討するため, 勝敗に対する態度を独立変数, 集団凝集性を媒介変数, 部活動適応感を従属変数とした仮説モデルを設定

し, そのモデルに従って共分散構造分析を行った。その結果, 有意な決定係数および, 直接的な関係については勝敗に対する態度の「勝利志向性」から「部活動適応感」に有意な正の影響が確認された。また, 間接的な関係については, 勝敗に対する態度の「勝利志向性」から集団凝集性の「社会的側面に対する集団の一体感」に有意な正の影響を示し, 「社会的側面に対する集団の一体感」から「部活動適応感」に有意な正の影響が確認された。

1. 勝利志向性, 集団凝集性, 部活動適応感の関係

勝敗に対する態度から部活動適応感への直接的な関係について, 勝利志向性は部活動適応感に有意な正の影響を示すことが確認された。これは, 勝利志向性が高い部員ほど部活動適応感も高いことを示唆している。深見・岡澤 (2016) の研究では, ある程度勝つことを中心に楽しむ生徒は相対的に満足度が高かった一方で, 楽しみ中心に取り組む生徒は相対的に満足度が低かったことを明らかにしている。本研究においても「スポーツではくやしいおもいをしたくないので, ぜひ勝とうと思う。」など勝敗にこだわる態度をもつ部員は, そういった態度で部活動に臨むことで, チームへ所属することの意義を感じたり, 「勝つ」という明瞭な目標に向けて取り組むことを通して, チームに対する適応感も高まる傾向があることが考えられる。

間接的な関係について, 勝利志向性は集団凝集性の社会的側面に対する集団の一体感に正の影響を示し, さらに社会的側面に対する集団の一体感は部活動適応感に正の影響を示すことが確認された。これは, 勝利志向性が高い部員は, 社会的側面に対する集団の一体感を強く認知することで, 部活動適応感が高まるということを示唆している。勝つことにこだわる部員は, 「勝敗」という明快な結果に対する評価や帰属過程がチーム全体と合致し, その過程での仲間との交流に対する感覚的, 精神



†パス上の数値はすべて標準化推定値。
 **潜在変数から観測変数へのパスはいずれも $p<.05$ 。
 ***潜在変数間の実線の矢印は有意なパス $p<.05$ 。

図 2 勝敗に対する態度, 集団凝集性, 部活動適応感の関係

的満足や反情といった対人相互作用によってチームの一体感を感じることで、部活動適応感が高まるのではないかと考えられる。

また勝利志向性は、社会的側面に対する個人的魅力と社会的側面に対する集団の一体感に有意な正の影響を示した。一方で、勝利志向性から課題的側面についての集団凝集性の下位尺度に有意なパスが確認されなかった。このことから、勝利志向性の高い部員は、勝敗という結果に対してのチームの帰属過程には魅力を感じる傾向にあるが、勝利を目指す過程に対しての目標設定や課題設定については魅力を感じるとは限らないということが示唆された。

さらに、課題的側面に対する個人的魅力と社会的側面に対する集団の一体感は、部活動適応感に有意な正の影響を示すことが確認された。これは、集団凝集性の課題的側面に対する個人的魅力、社会的側面に対する集団の一体感を強く認知している部員ほど、部活動適応感が高まる可能性があることを示唆している。このことからチームと個人の目標や課題が一致していたり、チーム内での仲間との交流による感覚的、精神的な満足や反情といった対人相互作用に対する、チームの全体的な統合感やまとまり感に魅力を感じていたりする部員は、チームに対する適応感も高まるのではないかとということが考えられる。

2. レクリエーション志向性について

本調査では、レクリエーション志向性に関わる有意なパスは確認されなかった。このことは、現行の運動部活動という組織集団において、スポーツを楽しむという態度は集団のまとまり感や適応感には影響しないということを示唆している。「集団」の勝敗に対する態度に着目した阿江(1985)の研究では、集団がレクリエーション志向性を強く認知している場合、集団凝集性の対人魅力凝集も高かったことが明らかになっている。つまり、本研究の結果に照らし合わせると、楽しむといった態度であるレクリエーション志向性が悪いのではなく、競技に対する個人が目指す方向性と集団が目指す方向性が不一致の状態では集団のまとまり度や部活動への適応感が高まらないということが在り得ることが示唆された。

しかしながら、深見・岡澤(2016)の中学・高等学校の運動部活動を対象にした研究では、生徒の多くはチームが勝利志向であると捉えており、特に高等学校の運動部活動では徹底して勝つ意識が強く、生徒の多くは生徒中心に決定したチーム目標があり、それをすべての生徒で共有していたことを明らかにしている。そのため、そもそも多くの運動部活動の志向性として勝利志向性があり、勝利志向性に従った目標設定がされるため、運動部活動における価値観として「スポーツはただ純粋に楽しむものである。」といったレクリエーション志向性を持つ部員は適応できない可能性があることが考えられる。同じ様に、中学・高等学校での運動部活動経験を通じた勝敗に対する態度の形成や組織づくりについて

の価値観形成によって、大学運動部活動においても勝利志向的なスポーツ活動を行ったことによって、競技やスポーツそのものに対してレクリエーション志向性が高まったとしても、それが仲間との凝集性の維持向上や適応感の向上にはつながらなかった可能性が考えられる。

文部科学省(2014)においても、運動部活動について「勝つことのみを目指すことのないよう、生徒が生涯にわたってスポーツに親しむ基礎を育むこと、発達の段階に応じた心身の成長を促す」と指摘しており、勝つことの重要性以上に、生涯スポーツの基礎の育成や心身の成長を重要としている。そのため、運動部活動において勝利志向性をもつ部員だけでなく、レクリエーション志向性をもつ部員も適応できるチームづくりやレクリエーションを目的とした運動部活動の検討も今後必要になるのではないかと考えられる。

V. まとめ

本研究では、大学運動部活動における勝敗に対する態度、集団凝集性、部活動適応感の関係についてモデルを設定し、検討した結果、以下3点にまとめることができた。①勝敗に対する態度と部活動適応感の直接的な関係については、勝利志向性は部活動適応感に有意な正の影響を示すことが確認された。②間接的な関係については、勝利志向性は社会的側面に対する集団の一体感に有意な正の影響を示し、社会的側面に対する集団の一体感は部活動適応感に有意な正の影響を示すことが確認された。③レクリエーション志向性は、集団凝集性と適応感に影響を示さなかった。以上のことから、勝利志向性が高い部員は、運動部活動において集団凝集性も適応感も高い傾向にあった一方で、レクリエーション志向性は、チームの集団凝集性や個人のチームへの適応感に干渉できないことが明らかとなった。このことから運動部活動において勝利志向性が前提の価値観となっており、楽しむといったレクリエーション志向性がチームの集団凝集性や適応感に影響しない、またはチーム運営において適切でないような環境になっている可能性が考えられた。そのため今後は、大学運動部活動のみならず、中学・高等学校の運動部活動においても、レクリエーション志向性を持つ部員も適応できるチームづくりやレクリエーションを目的とした運動部活動の検討も必要になるのではないかと考えられる。

参考文献

- 阿江美恵子(1985) 集団凝集性と集団志向の関係、および集団凝集性の試合成績への効果 体育学研究, 29, 4, 315-323.
- 尼崎光洋・清水安夫(2009) 高校野球部員を対象とした集団効力感の研究: 集団凝集性および部活動ストレスとの関連による検討 学校メンタルヘルス, 11, 23-31.
- 青木邦男(1989) 高校運部員の部活動継続と退部に影響する要因 体育学研究, 34 (1), 89-100.

- 青木邦男・松本耕二 (1997) 高校運動部員の部活動適応感に関連する心理社会的要因. 体育学研究, 42 (4): 215-232.
- Carron, A. V. (1982) Cohesiveness in sport groups: Interpretations and considerations. *Journal of Sport Psychology*, 4, 123-138.
- Carron, A. V., Widmeyer, W.N., and Brawley, L.R. (1985) The development of an instrument to assess cohesion in sport teams: The group environment questionnaire. *Int. J. Sport Psychol.*, 7: 244-266.
- 大学スポーツ協会 UNIVAS (2019) UNIVAS について 大学スポーツ協会オフィシャルサイト <https://www.univas.jp/about/> (参照日 2023年7月12日)
- 深見英一郎・岡澤祥訓 (2016) 運動部活動における目標設定, 勝利志向性, 意見の反映度の実態 並びにそれらが生徒の満足度に及ぼす影響 体育学研究, 61, 781-796.
- 桂和仁・中込四郎 (1990) 運動部活動における適応感を規定する要因 体育学研究, 35, 173-185.
- 金森史枝・蛭田秀一 (2018) 大学における正課外活動としての体育会運動部活動の意義—体育会運動部活動を通して何を習得しているのか— 名古屋大学総合保健体育科学, 41 (1): 45-54.
- 小林未季代・内田遼介・土屋裕睦 (2016) スポーツ集団の心理状態を評価する枠組みの提案: 集合的効力感と集団凝集性による2次元アプローチ 体育学研究, 61, 245-255.
- 文部科学省 (2014) 運動部活動の在り方に関する調査研究報告書—一人一人の生徒が輝く運動部活動を目指して— 平成25年5月27日運動部活動の在り方に関する調査研究協力者会議 http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/_icsFiles/afiedfile/2013/05/27/1335529_1.pdf (参照日 2023年6月6日).
- 室橋弘人 (2003) 分析のよさを評価する—適合度指標概論— 豊田秀樹編 共分散構造分析 疑問編 朝倉書店: 東京, pp. 122-125.
- 中須賀巧・阪田俊輔・杉山佳生 (2016) 運動継続のための大学運動部活動における動機づけ雰囲気, 自己開示, 満足感の関係. *スポーツパフォーマンス研究*, 8: 1-13.
- 織田憲嗣・山本勝昭・徳永幹雄 (2007) スポーツにおける集団凝集性の構造検証ならびにパフォーマンスとの関係 財団法人ミズノスポーツ振興会スポーツ医学科学研究助成報告書.
- 杉山哲司・加賀秀夫・杉原隆・石井源信・深見和男・筒井清次郎 (1996) 青少年のスポーツにおけるストレスと勝利志向性について 日本体育学会大会号, 45, 216.
- 角谷詩織・無藤隆 (2001) 部活動継続者にとっての中学校部活動の意義—充実感・学校生活への満足感とのかわりにおいて—. *心理学研究*, 72 (2): 79-86.
- スポーツ庁 (2018) 運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン 平成30年3月19日運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン作成検討会議 https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/013_index/toushin/_icsFiles/afiedfile/2018/03/19/1402624_1.pdf (参照日 7月11日).
- 豊田秀樹・前田忠彦・柳井晴夫 (1992) 原因をさぐる統計学 共分散構造分析入門 講談社: 東京, pp. 174-177.
- 高田知恵子, 田村宏, 石淵真理子, 藤永隆, 下山定利, 柚木仁, 黒梅恭芳, 丹野義彦 (1987) 部活動体験による青年期不適応について: 事例検討 群馬大学医療技術短期大学部紀要, 8, 37-45.
- 土屋裕睦: スポーツ臨床と動機づけ, 西田保 (編) (2013) スポーツモチベーション: スポーツ行動の秘密に迫る 大修館書店, pp.187-200.
- 筒井清次郎・加賀秀夫・杉原隆・石井源信・深見和男・杉山哲司・雨宮輝也 (1994) ドロップアウト時期を規定する心理的要因 日本体育学会大会号, 45, 242.
- 筒井清次郎・加賀秀夫・杉原隆・石井源信・深見和男・杉山哲司・雨宮輝也 (1995) 大学生のスポーツ参加・継続意識を規定する心理的要因について 愛知教育大学研究報告, 44, pp. 25-36.
- 筒井清次郎・杉原隆・加賀秀夫・石井源信・深見和男・杉山哲司 スポーツキャリアパターンを規定する心理的要因: Self-efficacy Model を中心に (1996) 体育学研究, 40, 359-370
- 内田遼介・町田萌・土屋裕睦・釘原直樹 (2014) スポーツ集団的効力感尺度の改訂・邦訳と構成概念妥当性の検討 体育学研究, 59, 841-854.
- 内田遼介・土屋裕睦・菅生貴之 (2011) 集団を対象とした集合的効力感研究の現状と今後の展望. パフォーマンスとの関連性ならびに分析方法に着目して 体育学研究, 56, 491-506.
- Widmeyer, W. N., Brawley, L. R., and Carron, A. V. (1985) The measurement of cohesion in sport teams: The group environment questionnaire. *Sport Dynamics: Ontario*, pp. 89-91.

別表1 勝敗に対する態度測定尺度（筒井ほか（1996）を参考に作成）

勝利志向性（5項目）

- スポーツは勝ってこそ喜びが生まれるものである。
- スポーツは勝つことに意義がある。
- スポーツではくやしいおもいをしたくないので、ぜひ勝とうと思う。
- スポーツの魅力は勝負があるからである。
- スポーツで勝った時の感激は何ものにもかえがたい。

レクリエーション志向性（5項目）

- スポーツはただ純粋に楽しむものである。
- スポーツは汗を流してストレス解消になればよい。
- スポーツは余暇を楽しむためにやるものである。
- スポーツは楽しむためのもので勝ち負けはさほど重要ではない。
- スポーツは気のあった者同志で仲良くできればよい。

別表2 集団凝集性測定尺度（内田ほか（2014）を参考に作成）

社会的側面に対する個人的魅力（4項目）

- チーム以外の者との付き合いよりも、チームメンバーとの付き合いのほうが楽しい。
- このチームでの活動は自分が所属している集団の中でも最も大切な集団のひとつである。
- 親しい友人がチームの中に数人いる。
- シーズンが終わって、チームのメンバーと会わなくなると寂しい。
- チームのメンバーとの付き合いは楽しい。

課題的側面に対する個人的魅力（4項目）

- チームが試合に勝とうとする意欲に満足している。
- このチームは自分のパフォーマンスを伸ばす機会を十分に与えてくれている。
- 試合のとき、自分の出場時間に満足している。
- このチームのプレースタイルが気に入っている。

課題的側面に対する集団の一体感（4項目）

- われわれのチームは、練習中にうまくできないメンバーがいるとき、メンバー全員でサポートする。
- われわれのチームは、試合で負けたり成績が思わしくない時は、チームメンバー全員が責任を感じる。
- われわれのチームは一致団結して目標を達成しようとしている。
- われわれのチームのメンバーは、チーム目標が一致している。
- われわれのチームのメンバーは、試合や練習のとき、それぞれの役割や責任などについて遠慮なく話し合う。

社会的側面に対する集団の一体感（4項目）

- われわれのチームは、それぞれ出かけるよりも、チームメンバーと一緒に出かけることを好む。
- われわれのチームは、シーズンオフの時でもチームのメンバーと一緒に過ごしたいと思っている。
- われわれのチームは、試合や練習以外の時でも仲が良い。
- われわれのチームは、チームのメンバー同士でパーティ（飲み会・食事会など）をよくひらく。

別表3 部活動適応感尺度 (青木・松本 (1997) を参考に作成)

部活動適応感 (9項目)

- 自分の意思が弱く、部活をやめてしまおうと考えることがよくある
 - 自分のやりたいと思うものが部活以外にできた
 - 部活に入っていることで、自分のやりたいことができなくて困っている
 - きびしい練習についていけない
 - いくら練習してもうまくならない
 - 部活の時間がくるのが待ちどおしい
 - 部活より友達と遊んだり、話したりするほうが楽しい
 - ケガや病気で練習ができない
 - 部活(行っているスポーツ)は自分にむいていない
-